

くもんのノンフィクション*愛のシリーズ

むすめ

なが さき

娘よ、ここが長崎です

げん ばく なが い たかし い じ かや の
原爆のおそろしさをうったえた永井隆の遺児、茅乃のねがい

筒井茅乃・作 松岡政春/保田孝・写真



くもんのノンフィクション*愛のシリーズ⑧

娘よ、こころが長崎です

一九八五年六月三十日

初版第一刷発行

二〇〇二年七月十五日

初版第二十刷発行

著者——筒井茅乃

ついかやの
まっおかまはる やすだなか

写真——松岡政春・保田孝

発行人——土居正二

発行所——くもん出版

東京都千代田区五番町二一 五番町グランドビル

郵便番号 一〇一八一八〇

電話番号 (〇三)三三三・四四〇〇一(代表)

(〇三)三三三・四四〇〇四(営業)

(〇三)三三三・四四〇六四(編集)

印刷所——共同印刷株式会社

NDC916・くもん出版 200P・22cm・1985年

©1985 Kayano Tutsui

落し・乱丁がありますからおとりかえいたします。

ISBN4-87576-219-4

Printed in Japan

*本書で使用了た著者所有の写真のうち、一部、撮影者不明のものがあります。心当りのかたは編集部までご連絡下さい。

くもんのノンフィクション*愛のシリーズ⑧

むすめ

なが さき

娘よ、ここが長崎です

げん ばく
原爆のおそろしさをうったえたなが い かし
い じ かや の
遺児、茅乃のねがい

筒井茅乃・作 松岡政春／保田孝・写真



娘よ、むすめここが長崎ながさきです
———
もくじ

*プロローグ(序章)(じょしょう) 6

つばきの木のある家いえで 15

木場こばへ 31

その日、浦上うらかみは 51

第十一救護班だいいきゆうごはん 73

アンゼラスの鐘かねはのこった 88

太陽たいようの島しま、宇久島うくしまへ 107



床についたお父さん	122
お父さんの死	138
時はながれて	156
心にともる愛の火は	167
*エピローグ(終章)	173
*あとがき	194
*発刊によせて(永井誠一)	188

筒井茅乃(作) つつい かやの

一九四一年、永井隆の次女として長崎県に生まれる。長崎大学卒業後、兵庫県の私立仁川学院で三年間教師を勤めた後、結婚して家庭に入る。一女の母。熱心なカトリック信者であり、教会の日曜学校で子ども達に接するのを楽しみとする。京都府八幡市在住。

松岡政春(写真) まつおか まさはる

一九二五年、長崎県生まれ。一九五五年より三十年間、浦上のカトリック関連の写真を撮りつづける。全日本写真連盟西部本部委員。

保田孝(写真) やすだ たかし

・九四五年、東京都生まれ。雑誌等でカメラマンとして活躍中。

写真・版下・取材協力(順不同)

筒井茅乃 永井誠一 林重男 津場貞雄 吉田潤
長崎市立永井記念館 長崎国際文化会館 長崎平和推進協会
長崎市立山里小学校 長崎市純心女子学園 兵庫県西宮市仁川学院 東京都千代田区立練成中学校 長崎新聞社 毎日新聞社 共同通信社 NHK長崎放送局
松竹株式会社 日本クリエイト

娘^{むすめ}よ、
こ^なこ^がが^さ長^き崎^きで^です

原^{げん}爆^{ばく}の^のお^おそ^そろ^ろし^しさ^さを^をう^うつ^つた^たえ^えた^た
永^{なが}井^い隆^{たかし}の^の遺^い見^じ、^の茅^{かや}乃^のの^のね^ねが^がい^い

筒井茅乃・作
松岡政春／保田孝・写真

*プロローグ（序章）じょしょう

おかの下から、おさない子どものはしやぐ声こゑがきこえてきます。

「わーい」という声につづいて、わらい声がおこりました。

子どもたちがはしりまわって、あそんでいるのでしよう。下の公園こうえんからあがつてくる、

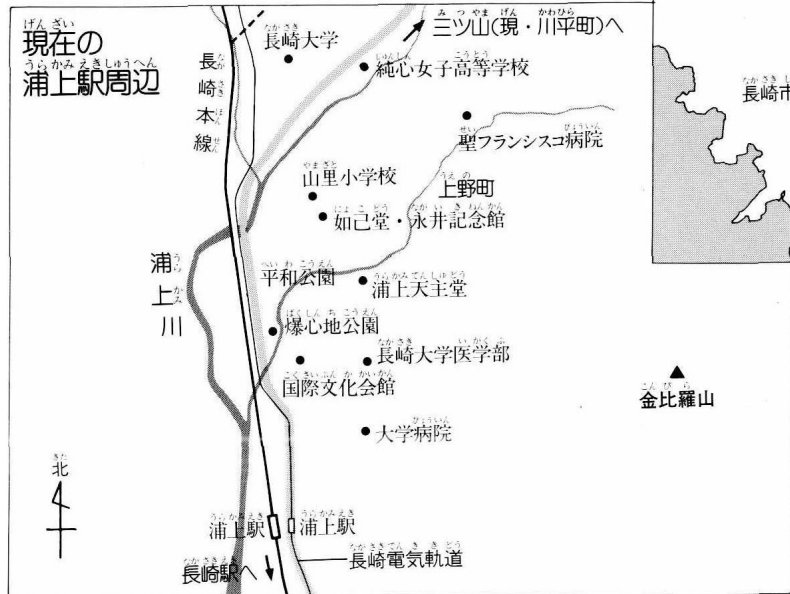
このあかるい子どもの歓声かんせいに、わたしは、ほっとした気もちになりました。

昭和五十八（一九八三）年春はる、わたしは肉親にくしんの供養くようのために、ひさしぶりに、娘むすめをつれて、生まれこきょうの長崎市ながさきしにかえりました。

わたしの生まれたところは、長崎市上野町うえのです。

そこは長崎の町をふたつにわけている金比羅山こんびらが東に、岩屋山いわや、稲佐山いなさが西にしにある、せまい土地とち。むかしから、浦上うらかみといわれていたところにあります。

きょうも、天主堂てんしゅどうの鐘かねの音がなりわたる浦上は、いまはなき、父ちちの永井隆ながいたかし、母ははの緑みどりと



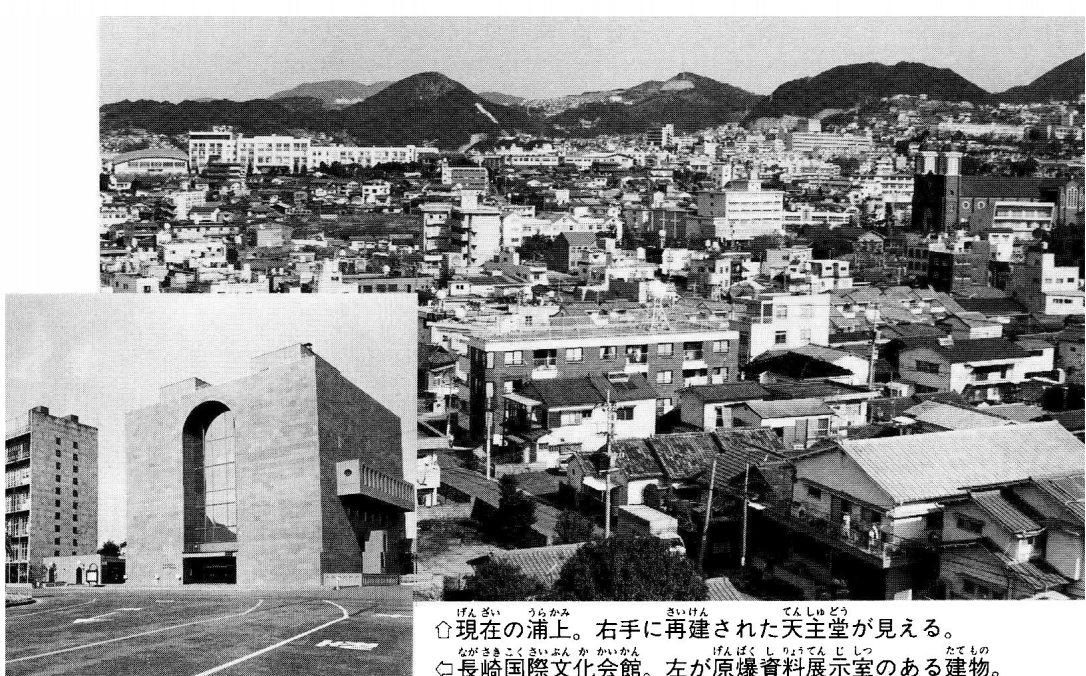
もにすごした思い出と、兄の誠一のあとをおつてあ
そんだ川や石だたみの道のある、わたしにとっては、
なつかしい思い出の地なのです。

*

娘の和子は、中学生になっていました。わたしは、
この機会に、ぜひ娘に、ここ長崎に原子爆弾がおと
されたことをつたえておきたいとおもっていました。
そこでわたしは、そのときいっしょに長崎にたい
ざいしていた高校生のおいとめい、それに、娘の和
子をつれて長崎国際文化会館の原爆資料展示室を
見学しました。

そして、国際文化会館を出ると、おかの下の爆心
地(原爆が爆発した中心地)あとにつくられた公
園へおりの階段の上まできて、立ちどまりました。

三月の午後のやわらかい日ざしのなかに、うつく
しく整備された公園が見えました。



げんざい うらかみ さいけん てんしゆ どう
 ☆現在の浦上。右手に再建された天主堂が見える。
 ながさきこくさいふん か かいかん げんぱくしりようてん じしつ たてもの
 ☆長崎国際文化会館。左が原爆資料展示室のある建物。

このあたり一帯は、わたしたちが立っているおから北の方向にある平和公園まで、起伏のある地形を生かして公園がつくられています。

わたしは、三人の子どもたちとならんで、むかしから浦上といわれていたこの町をながめました。

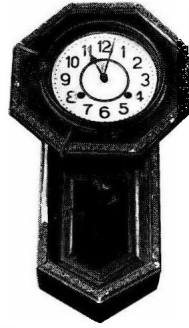
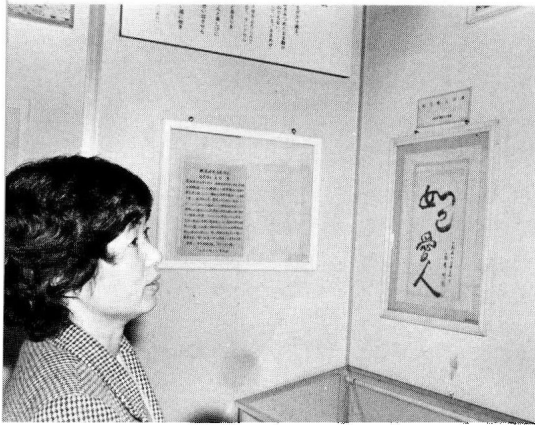
停留場にとまっている、チンチン電車。

信号がかわると、いつせいにはしりだす自動車。

公園の木だちに見えかくれる人たち。服の色がとりどりで、とてもきれいです。

わたしはこれらのものを目にしながらも、いま見てきた原爆資料展示室のことが、心からはなれませんでした。

十一時二分をさしたまま、時をきざむのをやめた時計。とけて、形のかわったガラスびん。さけた竹きていたときのよれがついたままの子どもの服。当時のひがいのありさまをつたえる写真——。



◇原爆資料展示室に展示されている、11時2分をさしたま
まとまった時計と、やけただれた服。
◇展示室にある、父の永井隆博士の資料コーナーを見る茅乃。

これらの遺品は、わたしがおさなかつたあのころ、
いつも身ぢかにあつたものでした。

しかし、きょう、あらためて目にとると、その悲
惨なありさまがおもいだされ、きょうふさえおぼえ
ました。

そんなとき、おかの下からきこえてきた、子ども
のはしやぐ声を耳にして、やっと、自分が成長し、
母親として現実の平和のなかにいることをかんじ、
ほっとしたのです。

このおもしろい、そばにいる三人の子どもたちにと
うつたえたらよいか、わたしには、ことばがありま
せんでした。

昭和二十(一九四五)年八月九日午前十一時二分
——。世界のうごきをかえた、人間のあの行為にた
いして、三人の子どもたちは、どんな印象をうけ
たのでしょうか。

いままで、わたしは、自分たちが体験した「原爆が長崎におとされた、『あの日』」らしいのことを、娘に、ことさらいいうことはありませんでした。

むしろ、ふれたくないものとして、さけていたのかもしれない。また、いおうとしても、なにからいつてよいか、まだおさなかつた娘をまえにして、ことばでいいあらわせなかつたのです。

*

きようは朝はやくから、祖母の三十回忌のミサ（カトリックの祭礼）が、ここ長崎の浦上天主堂でおこなわれました。そのために、兄とわたしは、子どもたちをともなつて帰郷したのです。

ミサには、原爆がおとされた「あの日」、浦上の北がわにある長崎市三ツ山町の木場（現在の川平町）の家に、浦上からひなんしてきた親類のおばさんたち、父や母のなきあと、わたしたち兄妹を、そだててくれたおじさんの家族も参列しました。

わたしたちは、ミサのあと、ささやかな会食をしました。

「こんなふうに、親せきがそろつたこと、あつたかなあ。」

だれかがききました。

「いや、はじめてばい。」

だれがいうともなく、こたえました。

ほんとうに、「あの日」は、きのうのことのようにおもえていたのに、年月はもう、あれから三十八年ちかくすぎていたのです。

そしておさなかつたわたしは、中学生の娘をもつ母親となっていました。

あのころ、まだわかくて、「あね（姉さん）」とよばれていた人たちも、すっかり年をとっていました。わたしをかわいがってくれた、母のいとこのフジエおばさんとタツエおばさんは、白内障用のレンズのあついめがねをかけて、むかしより、からだがひとまわりも小さくなっていました。

「フジエおばさん、目のぐあいはどうですか。」

わたしはたずねました。

「うん、手術ば、したけんね。見ゆることなつたとき。」

と、かつてのフジエあねは、むかしとかわらぬやさしさで、にこにことおだやかにこたえました。

わたしには、長い年月をとびこえて、おさない日に見たままのわかいフジエあねがそこにいるように、むかしといまのすがたが、かさなつて見えました。

しかし、この年月のあいだには、それぞれのあゆみがあったのです。

＊

爆心地の公園のしばふは、春の新芽で、若草色にかがやいていました。

この公園の上空でさくれつした原爆は、いっしゅんのうちに、おおくの人びとの生命をうばいました。また、生きのこった人たちも、おおくのものをうしなしました。

たとえば父母、兄弟、姉妹、自分の生活、健康……。ある人たちは、たがいのあいだの信頼や愛情さえも。

「あの日」のことなど、まるでなかったように、公園は三月の午後のやわらかい日ざしをあびていました。

公園の一角には、「あの日」、いっしゅんにしてはいきよとなった浦上天主堂からうつしたレンガのかべが、木だちのあいだから赤い色を見せていました。

＊

わたしの名まえは茅乃。かやの茅は、春の野原に小さな白い穂をなびかせている「チガヤ」のことです。父が、名づけてくれました。

わたしが生まれたのは昭和十六（一九四一）年八月。長崎市上野町です。

生まれた年の十二月八日に、日本軍はハワイの真珠湾をこうげきしました。日本とアメリカとの戦争が、はじまったのです。

それまでも日本は、中国大陸などで戦争をしていましたから、わたしは戦争のさいちゅうに出生したわけです。

わたしが生まれるまえとあとに、二度、父は戦争に出かけています。この長い戦争は、わたしが四歳になる数日まえに、やつとおわりました。

いままで、そのころのことを人からきかれても、

「わたしは、まだ小さかったので、よくおぼえていません。」



爆心地公園にある「平和を祈る子の像」をおとずれた茅乃。――原子雲の下で母さんにすがって泣いたナガサキの子供の悲しみを、二度とくり返さないように――（台座にきざまれたことにより）

とこたえてきました。

当時のことを、ありのままことばで表現することは、わたしにとって、とてもむずかしいことだったのです。原爆にあつたことのない人に正しくつたえられるかどうか、まして戦争をしない人がしんじてくれるかどうか、と――。

しかし、あの原爆が長崎におとされたすこしまえのころ、そして、それから数か月間におこつたできごとは、きょうまで、けつしてわたしの心のなかからきえませんでした。

小さくて、やんちゃだった「かやちゃん」。母がつくってくれたかすりのもんぺをはいて、飛行機の爆音におびえていた、三歳のかやのが、いまもわたしのなかに、いるのがわかります。

つばきの木のある家で

かやのの家は、つばきやくすのきでこんもりとした林につつまれて、おかの上にあります。近所にすむ人も、ほとんど何代もまえからすんでいる人たちです。

このあたりは浦上とよばれ、キリシタン（キリスト教の信者）のさとでした。

かやの家のちかくには、長与道とよばれていた、ふるい街道がとおっていました。

一五九七年、京都から長崎につれてこられ、処刑されたキリシタンの二十六聖人も、この道があるいて、長崎の刑場に入つたとつたえられています。

長崎は外国との貿易港として、ふるくからさかえ、また、キリスト教も、はやくから信仰された町でした。

しかし、一五八七年、キリシタン禁令が出され、日本各地のキリシタンは信仰をすてるようにと、はくがいされました。二十六聖人は信仰をすてるのをこぼんだために、はりつ